

村野次郎創刊

香蘭



2024年(令和6年)2月号

第101卷

第2号

通卷1118号

二〇二四年(令和六年)二月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇一卷第二号

妻やみてひとり遊べるをさなごにさくらの花

をとりて持たすも

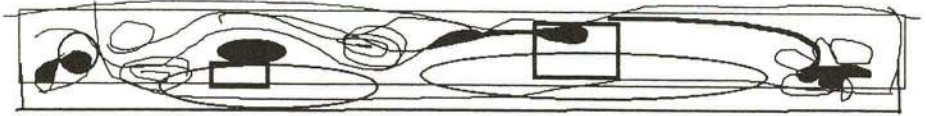
『夕あかり』

この作品は『夕あかり』に収録されている大正十三年、先生三十歳の時に詠まれた歌です。先生は歌人としても実業家としても、輝かく成功された方と認識しておりましたが、結婚されてわずか三年で最初の奥様を亡くされた事を知り、何とも言い難い思いをいたしました。この歌の結句の「とりて持たすも」の後に続く、文字にならない言葉を思うと胸が詰まる思いがします。

この作品を選んだ理由として、私の母も身体が弱く私が五歳の頃には余命宣告を受け、不憫に思った伯父が人形を買ってくれたことがありました。その時の優しい眼差しが今も焼き付いています。幸い母は持ち直し天寿を全うしました。

千々と代表の解説にも「白秋は歌を人生に、次郎は人生を歌にした」とあります。先生の生涯と良き歌に出会わせてもらいました。

『夕あかり』101頁、『村野次郎三百首』12頁に掲載)



香 蘭

2024年(令和6年)2月号
第101巻 第2号 通巻1118号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(102) 竹本幸子・表二
 近詠十五首 見る 篠永路子

推薦香蘭集

作品一 十首選(十二月号) 桜井京子選 15
 作品二・三 十首選(十二月号) 高島憲子選 16

一頁公論(33) 季節の言葉 18
 村野次郎への旅(166) 20

「香蘭」とともに(4) 比べてみれば 30
 続・酔風船(2) 「風船の会」のこと 31

エッセイ・自由研究 歌人 源頼朝 42
 エッセイ・自由研究 酔風船飛び交う 44

七首抄(十二月号) 「蟬」の歌 46
 小笹岐美子「デラシネの子」評(十二月号近詠十五首) 48

作品一 50
 作品二 52
 作品三 54

香蘭集

緑地帯 56
 耳言あれこれ(27) 「寓諭」について 58
 大井田・柏原(義)・小城

明宝研究会 第一四六回 十一月例会 「時事詠」の現在 61
 他誌拝見131 62
 土井

歌会及び会合・会員消息・他 66
 2024(令和6)年度 全国大会、記念祝賀会 67
 2024(令和6)年度 全国大会、記念祝賀会 74
 編集後記・新宿日記 76

2024(令和6)年度 全国大会、記念祝賀会のご案内 84
 表紙絵 山口 蓬春「桃」 86
 目次・緑地帯カット 和田 和雄

四選者の作品

夢だから 平塚 千々和 久幸

まず食うことそれから暮らしの雑用を片付け暇があれば歌詠むこの人が居ても居なくとも日は昇るさは言え昇る日に嫉妬して霧雨の彼方に淡き虹の出ずわが残生の溜息に似て

身の内に結びゆくもの数えつつ朝の海べりに自転車を駆るブーチンか貧乏葛ひんげなすか知らざれど用なきものは見ずに過ぎたり紅屋町べにやちように待つ人あれば傘さして逢いに行きたり黄昏ちかく

夢だからといえは誰にも許されていよよ放恣に向かう心は午後四時に入浴そして酒となる彼岸の妻の知らざる暮らし

元気の「氣」 鎌倉 高 島 憲 子

元気の「氣」の中に米があるんです 井上ひさし語録にありき米どころの茅葺き集落も井上邸も古民家を今に再生したる紙漉きと米作りせし代々が「孫四郎」の名継ぎて来たりき「孫四郎米」と和紙に墨書し丹精の米を詰めたり孫四郎まきしろうさんは鎌倉の井上ひさしの住まひしは古民家再生のさきがけなりき谷戸深き御寺に秋の歌会あり井上ひさしの永久の眠り処

井上ひさし 専用箋を持ち井上夫人の来る秋日和

書くべしと語れるごとし井上ひさし専用箋の白きマス目は

一 本 道 我孫子 丸 山 三枝子

ものすごい鳥をしまう森にしてこの明るさとこの静けさは天を突くメタセコイアは八百年佇ちつくしいる古利根の森古書店に来て手にとりし一冊のモロッコ皮の本のつめたさ秋たけて家族も他人と思う日は言葉つつしむパピポポポ国境を越えしことなき我に来るモンゴルよりのメールの銀河心して踏みしめ歩く一步一歩ころばぬように足も言葉も歩けなくなるまで歩くふらふらとわたしは歩く一本道を長電話きりていささか長いものに巻かれたような解かれたような

椎の木の道 東京 桜 井 京 子

百日紅やくめを終へて霜月の庭のしづかな木立となれり晩秋に咲かず紫陽花あるといふ近親婚のやうな小暗さ

寂しさを拾ひあつて行くやうな日暮れの道なり椎の木の道椎の木になつて私は立つかしらあなた去つて行きたる後ををさなごと遠く旅せり目覚めればあれは四十歳しじふになりたる息子遠く住む息子の稀の電話なりアマゾンフォトを見てくれと言ふ熊が出て人が死んだといふニュース歌ふべけんや祖国の秋をかめ橋わたつて次はつばさ橋むかうに光る海が見えをり

作品一 十首選



(十二月号作品から)

桜井京子 選

・かの人はいずこにいかにも暮らしいん鬼平見ながらふとも思えり

千々と久幸

「鬼平」は言うまでもなく、池波正太郎原作の時代劇「鬼平犯科帳」のこと。主役の中村吉右衛門は惜しいことに近年亡くなってしまうが、テレビの再放送は今も続いている。

作者は「鬼平」に触発されて、交流のあつた誰かを思い出したのだ。「かの人」は鬼平のように正義感溢れるナイスガイか、あるいは脇役として登場する女優の誰かに似ているのかも知れない。軽く歌い流されているので、人生を左右するほどの相手ではないようだが、多少の彩りは与えてくれたのだ。多分どこかで安穩に暮らしているのだろう。一首に多くを盛り込まなかったことで背後に空間が生まれ、読者が自由に想像を膨らませることが出来る歌である。

・み社の雪洞変はらず灯さるる変はらぬがよしの葉月かまくら

高畠 憲子

古都鎌倉に長年暮らす作者。地元の鶴岡八幡宮では、毎年立秋の前日から「ほんばり祭り」が行われ、夏の風物詩となっている。たくさん雪洞が灯る幻想的な景色の中を、作者は今年も見つめてめぐるのである。雪洞は長年見続けて来た変わらぬ光景だが、作者自身も

作者の周辺もこの間、さまざまに変わってきたことだろう。変わらないものと、致し方なく変わっていくものの儚さがこの光景の向うにかいま見える。「葉月かまくら」と歌いおさめて、鎌倉への深い心寄せが窺える歌である。

・かたはらに居るべき人の戻りきてわれに初秋の日常もどる

相川 公子

かたわらに居るべき人とは連れ合いであろう。そばにいたのが当たり前であったが何かの事情でいなくなり、今また戻ってきたことの安堵感がさりげなく歌われている。日頃、その人はいて当然であり、時には鬱陶しさもあつたかも知れない。いなくなった時に初めて、その存在の大きさに気づくというのはよくあることだ。猛暑が収まった後の「初秋の日常」が効いている。年齢を重ねた同士が寄り添い合い、丁寧に生きて暮らしぶりが窺える歌である。

・エゴの木につぼみふくらみ白き花咲きてむすめの死は近づけり

伊藤美恵子

親として逆縁の子を見送るほどつらいことはない。この歌は、娘の死の時が近づいていることを、エゴの木の花に託して淡々と歌っている。春先に白い小さな花をたくさんつけるエゴの木。希望に満ち溢れる季節のなかにあつて、その対極にあるような娘の死をこの作者は歌うのである。よほどの諦観か胆力がなければこうは歌えないと思うのだが、悲しみを超越して娘の死を美しいものの如く捉えたとくるところに凄味が感じられる。エゴの木の花の明るさは、抗いたくても抗うことの出来ない運命を見据えた、作者の透徹した死生観によるものであろう。長く立ちどまらずにはいられない歌であつた。

・夕暮れの木々の奥より鳴き出づるこの世を抜きたいひとつか
ナ 江口 絹代

夏の夕暮れ時、どこか物悲しそうに聞こえるカナカナの声。じつと聞き入っていると、その声はこの世とあの世が、あたかも地続きであるかのような錯覚に陥らせる。あの世の人もカナカナの声をどこかで聞いているのではないか。「この世を抜きたい」とカナカナに言わせ、自身の思いをそこに重ねている。背景には亡き人への追慕があり、切ない歌である。静謐で寂寥感のある歌であると同時に、作者の心映えの美しさをも思わせる佳作である。

・凄いのは何があつても自身には絶望しない僕の母さん

鈴木 桂子

一首全体が息子から投げかけられた言葉でなり立っている。「凄いの母さん」と評された作者は、俗にいうゴッドマザー。かく言う息子の方は、何度も絶望しかかかって、都度、母に励まされ続けてきたものか。励まされる息子もつらいが、励ます母には母の思いがある。何があつても絶望しない母と見られたら、そう振る舞うしかないではないか。たぶん息子には、母の本当の心は見えていないのだろう。息子の言葉に苦笑しつつも、己の言葉を貫こうとする作者だ。

・手術日に赤飯炊きて食みいたり腫瘍を取るはめでたきことなり

長野 道子

「手術」とタイトルのある一連の中の一。赤飯はおめでたい行事の時に頂くものだが、手術がそれに相当すると言いつつ芯の強さ。自身に炊いた赤飯は、手術に向かう自身を鼓舞するためのものである。体の中に勝手に増殖する腫瘍は忌々しい存在であり、確かにこ

れを取り去るのは悪いことではない。長く病氣と闘いながら、常に前向きに生きようとする作者。この前の歌の鈴木桂子さんと立場は違うが、何があつても絶望しない歌詠みがここにもいる。

・「一番でなくてもいいよ」夕べには東京タワーが明るく点る

牧野 道子

東京タワーはスカイツリーが出来るまで半世紀以上、日本一の高さを誇ってきた。日本一ではなくなった今も、変わらず立ち続けて東京の街を見守っている。この歌には何事につけ競争することへの虚しさ、敗者への温かな眼差しを感じる。殺伐とした世間にあつて、敗者であつても胸を張って生きられる世の中であつてほしい。そう願う作者の心優しさに、今宵も東京タワーが明るく点っている。

・暑ければ暑いほどよし清々と今朝もオクラは花を咲かせる

満木 好美

猛烈な暑さが続いたこの夏。人も植物も弱り果てたかと思いきや、オクラは元気に花を咲かせたのだ。人は夏の暑さを嘆くが、オクラにはむしろ大歓迎なのだろう。薄黄色の美しい小花を付けるオクラ。花が終わると実を取獲出来るのも嬉しい。健気に咲くオクラの花に励まされた気分の歌である。

・長旅の途中のようにゆうゆうと猫が横切るわが庭先を

宮原 迪恵

野良猫が庭を横切ったという瑣事を掬った歌だが、心惹かれるのは上句の比喩の巧みさによるものだ。代り映えない日常にあつても、見果てぬ旅への憧れが覗く。年齢を重ねつつ人生への思いを深める作者。ある日訪れた詩の虹を見せられた思いがする歌である。

作品二、三 十首選



(十二月号作品から)

高 島 憲 子 選 選

・どこ見ても二十歳未満に見えざるをパネルタッチで確認される

丑山 眞弓

たとえば、コンビニで酒類を買う場面などを想起する。必ず、年齢確認画面のタッチが要る。筆者も、見ればわかるやろ、と最初のうち心中でばやいたが、最近慣れ、機械相手にこちらも機械的にタッチして済みます。ここでは、状況を文語で簡潔に述べる。画面にタッチするのはこの我ながら、機械が確認して事が進む。人間の方が確認されるのである。現代はAIをはじめ、様々な機器と共存せざるを得ない。生じるストレスが、このような時事詠を生む。

・石退かし潜める虫を掴みては何の虫かと五歳のフェアブル

加瀬喜美江

五歳のフェアブル、が簡潔ながら言い得て妙。おそらくお孫さんであろうが、孫と言わず、その年齢も、今、虫に夢中であらうことも、読者は想像できる。好奇心いっぱいの小さなフェアブル。この虫少年が、ダンゴムシか何かを掴む表情が見えてくる。

・少しずつ老いてゆくのが願いにて段だら坂の野薊の花

庄司 健造

段だら坂、という坂の名前が、この一首の魅力。実在する固有名詞ではなさそうだが。どこにでもあって、どこにもない。作者の心中の坂かもしれない。「老いは、直角に来る」と昔、ある歌人が言ったそうだ。ある日急にがくんと来るのは困る。なるだけ、段だらとゆるやかに来てほしい。この野薊は、作者のいつも歩む段だら坂の傍らに咲いているのだろう。どこでも見かけるこのやさしい野花。それへ語りかけるような詠み口に味わいがある。ここではタンポポでなく、野薊がしつくりくる。触るとちくつと痛いのだ。

・一本の茎に黄の花のみ咲かせ二心なき白粉花よ

田中あさひ

白粉花は、夏の路地の夕暮に静かに咲いているイメージ。その香りはほんのりやさしい。昔、その黒い実を割って、中の白い粉で遊んだ記憶が筆者にはあり、郷愁を覚える。花の色は、白や赤紫、黄色をよく見かける。時どき、絞りというのか、二色の混ざりもあつたりする。作者はたまたま、一本の茎からみな黄色い花をつけたそれを見た。黄花にその決まりがあるのか、という野暮な話は要らない。二心ふたこころなき、と詠まれたとたんに一つの世界が顕れ現われてくる。かの源実朝が後鳥羽院への恭順の気持ち詠んだとされる「君にふた心わがあらめやも」のイメージが重なる。二心、の一語で歌に深みが出た。白粉花という名や、一本に黄のひと色のみ咲かず、という把握から、擬人化がすんなりと胸に落ちる。一途な人間を思わせるこの咲き方に、白粉花よ、と心を寄せている。

・空蟬をあまたつけいる花梨の木離れにし蟬のその後は知らず

中井 房江

花梨の木に数多の空蟬を見たという。その景から、そこを離れていった数多の空蟬たちに思いを馳せる作者。淡々とした描写と、その後を知らず、と感情を抑えた静かな詠み口が余韻を残す。花梨という木の名と空蟬とが、どこか物語めく。何がどうした、ではなく、物を言わぬ静謐な雰囲気を楽しみじみと味わいたい一首。

・いくつもの思い出のなかつ先に友は言い出すわが忘れたき事

三澤 幸子

これは自分の歌ではないかと思うくらい、ううむ、と唸ってしまった。本当は忘れていて欲しかったのに。よりにもよって、それを言うかなあ、という作者のボヤキが聞こえる。一首に詠み、また筆者のような共感者を得、作者は少し心が晴れたであろうか。結句字余りに思いが出た。話は飛ぶが、辞世に一首を詠むという行為がある。この一首をもつて、この世に別れを告げる。そのくらい、歌には目に見えない力、霊力がこもり、後世に残る。大げさながら、歌のもつエネルギーを思った。

・絶食後の朝の重湯を飲み込んで底に沈める米粒をかむ

山下 紘正

作者はすでに、歌で公表しておられるように、病を得、治療中である。入院の日々の一こまがこの一首よりうかがえる。筆者の親が絶食後の快復の途次、重湯をいただき、その場に居合わせた。やつと重湯が飲めると顔を輝かせていた。結句の米粒をかむ、のところに、自分の今ある生命を噛みしめているようだ。病を克服しようとする静かでも、強い意志がここにある。ご快癒を祈る。

・忘れたい事を抱えてそのままに深夜の雨はさらさらと降る

川久保百子

前に掲出した三澤作品にもあった、忘れる、というキーワードがこの歌にもある。河島英五のヒット曲を思い出す。人生は悔恨の連続。でも、いいんだよ、という慰謝の声がどこからか、聞こえてくる。作者に降る雨が、忘れたいことを抱えて今夜もさらさらと降っている。さらさらと、というオノマトペに、サ音のやわらかさ、流れるような感じがあり、(そのままに)が上句下句、両方に響く。

・母と見し古き映画のワンシーンよみがへること蕎麦の花咲く

澤田久美子

この一首の後に、蕎麦畑、とある。花のひとつ一つは白く地味だが、畑一面となると壮観。蕎麦の花が咲く畑を見た折、去来した思いを上手く一首にした。初句から四句までが、比喩。(母は故人かもしれない。母と見た映画のワンシーンと、蕎麦の花畑とのイメージが、母恋の心情に重なったようだ。筆者の記憶になるが、小津安二郎の「麦秋」ラストシーンで、麦畑が波打つ。白黒なので蕎麦畑のようにも見え、歌のイメージに重なる。穏やかだが光る一首。

・円錐のてつべん細く尖らせて風を呼びをり揺るる銀杏は

田村 久美

ユニークな詠み口で、銀杏を擬人化する。物理や数学で出てくる円錐を、銀杏の形の比喩として用いている。ふつう、風が銀杏を揺らすのだが、発想が逆。揺れる銀杏が風を呼ぶ、という把握は、まさに直感による発見。主観のある擬人化の歌には、既視感がありがちだが、こちらは独創的な発見がある。新しい感覚の叙景歌として鑑賞した。

篠永 路子

探偵はこんなところを視るのだろう本の傾き散らかり具合

整然と並ぶ書籍の背表紙の影や丸みがリズムをつくる

海を見て海と思わず空を見て空と思わず見る嬰兒よ

眼に映る色や形のそのままを瞳のペンでトレースしてる

街並みを魚眼レンズで切り取れば新しき景生まれてきたり

試し刷りを印刷所にて手に取りぬインクは朝の匂いのようだ

漆黒のインクはビロードの滑らかさ包まれゆけば胎児に還る

プレス機に圧縮されし銅版のインクの黒はあくまで深い

古ぼけた地図に描かれたナイル河 俯瞰しており鳥の気分で

コウモリとウサギの模様が繰り返し絹地の白を染めてゆくなり

箔押しのお白き花咲く紙の函 見つめておれば風花になる

見
る

ひと言随想

達成感と共感

野うさぎの冬毛の真白 雪原に黒眼ふたつが飛び跳ねてゆく

黒白があり赤青が生まれ出て黄色で世界が色づき始む

透かし彫りの石の花々咲き揃う翡翠輝石の永遠の花園

アイスクリームを口で蕩かす 彼方から蜃気楼が見えてきそうだ

電車やバスで風景をずっと見ている習慣がある。あの建物の青がきれいだなとか、この三差路の角度がおもしろいなどか思いながら。人の手による精緻を極めた作品も好きで一日見ていたい気持ちになる。

ただ見て過ごすだけの時間だから人に言えるようなことではないのだが、ほかの人と違う見方になることが多々あるらしい。

自分に取っては普通のことでも他者から見

れば違和感があるようで、共感を考えて歌を作ると何だが自分の歌ではない、形骸化しているような感じがしていた。

必ずしも共感はなくてもいいのではないかと投げかける歌であってもいいのではないかと思ひ、今はできるだけ自分の感覚に正直に歌を作るようにしている。

丸山先生の励ましに甘えさせていただき、どうにか作り続けています。

「香蘭」とともに (4) 鈴木 桂子

——比べてみれば——

〈何を見て来たのだろうか……〉

〈愛〉が必要

私が短歌に出会うのはずっと先、六十歳を過ぎてからののだが、私はいわゆる文学少女ではない。田舎に生まれ、絵本など見ることもなく育ち、図書室もない小中学校生活を送り、ペビーブームで足りなくなった教室に、ギョウギョウに詰め込まれて日々を過した。そんなであったから、語るほどの読書経験は全くない。強いて言えば小五の時、教室の隅っこで見つけた『南総里見八犬伝』を読んだことくらいか。八犬士の鮮やかな姿が読後に残った。そして嘘のような話だが、私は中学生になって初めて漫画というものを見た。近くの文具店から貸し本の漫画を誰かが借りて来たのであろう。当時漫画は学校から読むのを禁止されていたのだが、『快傑児雷也』の巨大な薯の絵と、それに乗って妖術を使う「児雷也」に瞠目した。「八犬士」といい「児雷也」とい

い、昭和の戦後の世に私は江戸期のヒーローと生きていたらしい。

高校生になると生活が一変した。五時半起床、六時に家を出て自転車まで駅まで三十分。結城駅から蒸気機関車に飛び乗って小山駅へ。

両毛線に乗り換えて小池光氏の詠む「思川」を渡り栃木駅で下車。駅から全力疾走すること十五分、八時高校に到着。夏も冬も体力勝負の三年間を走り抜き、高校生活も「文学」とは全く無縁で終わった。

東京の目白で育ったという私の友人は、私が走り回っていたその頃、

家は貧乏なのに、本は大量にあった。日本、世界の文学全集、ミステリー全集等。中学時代は吉川英治、高校時代は野坂、ヘッセ、サドにのめり込んだ。

と語る。貧乏のケタが違い過ぎる。私の村の貧乏は飯に困ること、裕福は飯に困らないこと、明快だった。それにしても東京の中高生というのはこんなだったのか。六十年以上も

前の話であるが、友は、

子供心に世の中への不公平感があった。あらゆる種のベシミズムみたいなものもあって、

吉川流無常感、私本太平記に魅せられた。

教養主義的に世界文学とか源氏なんか読む奴らは好きじゃなかった。その反動で野坂、サドへ。世の中が軽薄にしか見えなかった。

という。そして高校の数学好きの友人の質問に、次のように答えた。

数学は答えがひとつ、文学は答えが無限。政治は多数決が正義、文学は個人が正義。高校生らしい回答である。友の話聞きながら、私は己の単純さを改めて知ることになった。私は今まで何を見て来たのだろうか。

友は私同様、定年を機に短歌を詠み始めた

同世代人である。深く心に届く歌を詠む。歌は歌として、私にはどうしても友に勝てない

ものがある。それは短歌への「愛」である。歌を始めたものの、散文に慣れた私の目には、

短歌の文体の密度のゆるさが気になってなら

なかった。歌を詠みつつ、いつもどこかに不

満が残った。不満を残しつつ詠む歌は、中途

半ばな自分を写し出すばかりで、ますます不

満を募らせた。いい歌の生まれようがない。

友は短歌の「弱み」とされて来た諸々を含

めて短歌のすべてを愛し、今ではそれらを「強

み」にかえて短歌を詠んでいる。実に楽しそ

うだ。愛は強い。短歌にも愛が必要である。

続・酔風船(2)

千々和 久幸

「風船の会」のこと

神奈川県大磯町にある鳴立庵でわたしたちは月に一度「風船の会」と称する短歌会を開いている。なぜ「風船の会」なのかは、前回に書いたわたしの旧著「酔風船—Q氏のいたずら日記」から採ったもので詳細は省く。この鳴立庵は西行法師の「心なき身にもあはれは知られけり鳴立澤の秋の夕暮れ」に由来する。西行が吟遊したこの地に1664年、10畳、8畳、4畳ほどの小さな庵が結ばれ今日に至っている。建造者は小田原在の俳人の崇雪である。

風船の会の仲間はおおかたが高齢者。高齢者で思い出すのは、五木寛之(『林住期』)や山折哲雄(『老いと孤独の作法』)が説く四住期説である。ご存知の向きもあるが、これはインド哲学に基づく死生観で人生を四つの時期に分ち、後半生の「家住期」や「遊行期」の意義を強調したものだ。世俗的に言えば「第二の人生」をいかに生きるか、という命題に答えたものである。

ただわたしにはこの「第二」という発想がどうにも物欲しげで好きになれない。若かろうと年を取ろうと、第二という退嬰的な姿勢が気に入らない。常に先頭を駆けたいという情熱はまだ失せてはいないからコまる。ま、それはご愛嬌としても、とまれ両先達の意見を翻訳しお復習いしておけば次のごとくである。

まず人生を便宜的に四つの時期に区切って「学生期」(青春〓青年、一〓二十五歳)、「家住期」(朱夏〓壮年、二十六歳〓五十歳)、「林住期」(白秋〓初老、五十一歳〓七十五歳)、「遊行期」(玄冬〓老年、七十六歳〓)とする。

このような人生観に立つて、まず山折は「林住期」を「それまでの人生で他者のために何かをしていた人が、初めて自分の好きなことをするために生きる」時期だとする。(『老いと孤独の作法』)。

一方の五木寛之は「人生のクライマックス(黄金期)は、じつはこの後年、ことに五十歳から七十五歳までの『林住期』にあるのではないか。『苦』の世界のなかで、『欲び』を求める。真の『生き甲斐』をさがす。それを『林住期』の意義だと考える」(『林住期』)と言い、「林住期」を人生の黄金期と決意することから、新しい日々が始まるのだと私は今つよく思う」と結ぶ。因らずも両先達は「林住期」を人生の円熟期とすることで一致する。

さらに山折説は言葉を継いで「日本の歴史をつぶさに眺めてみると、随所に第二の人生を上手く生きた人物がいる。例えば、西行、雪舟、芭蕉、一茶、良寛などである」と。

「風船の会」に話を戻せば、ここに集う仲間は「林住期」が大半で「遊行期」もぼつぼつ混じっている。しかし歌会では一首の理解を巡って喧喧囂囂、侃侃諤諤、時間超過は常。第二の人生どころかいずれも「学生期」に戻って意気軒昂である。だがはてさてこの仲間がどの程度に己の「林住期」や「遊行期」を意識しているかどうかは聞いたことがない。いや聞かずとも彼、彼女らがいま人生の黄金期を生きていることだけは間違いない。

昭和期の「香蘭」（一）

千々和 久幸

今月から「香蘭」昭和二年（1927）年の作品を順次読んでいくことにする。創刊号より巻を重ねて今年度は第五巻、さっそく第五巻第一號を開こう。表紙畫裏畫及び題字は北原白秋、編輯兼發行者村野次郎は変わらなぬ。総頁六十二、定價一部金四拾錢郵稅貳錢である。

第五巻第一號は正月號とあり、表紙を繰ると「香蘭」第五巻第一號の下に黒枠で「謹ミテ大行天皇ノ御登遐ヲ悼ミ奉ル」とある。時代がひとつ捲れ、昭和天皇（裕仁）の時代に突いたのである。

さて例によって目次から見ている。最初の同人欄の出詠者十四名は、村野次郎以下次の通り。酒井廣治、橋本政一、本間樂寛、冬野木枯、南部松若丸、川村浩、南草萌、東朱雀、石野正太郎、島田旭彦、橋本敏夫、清原齊、杉浦翠子。

この中でわたしが「香蘭」入会後出合い、今も記憶に残っているのは村野次郎、冬野木枯（清張）、石野正太郎の三人である。次いで特集という趣で「現在短歌は餘りに古典的なりや」という問いに、歌壇の三十八名が3行から20行内外で答えている。

次の短歌欄（さしずめ第二同人というところか）には芥子澤新之介、成田憲三、横山信吾、佐藤達夫など十三名が出詠。ついでに記せばこの欄でわたしが面識のあるのは、横山信吾、佐藤達夫（竹内忠夫か）である。

さらに目次を追えば、杉浦翠子のエッセイ「北原白秋先生の一首に就いて諸兄に問ふ」があり、睦月集（短歌）に十三名、その後川村浩のエッセイ「觀察斷片」、前月歌壇合評（杉浦翠子、村野次郎、橋本政一、本間樂寛）、あらたま集（短歌）に今福公一、大貫迪子など十名、この欄では今福公一（祥か）、大貫迪

子とは面識がある。次いで初雪集（短歌）に十数名、朝光集（短歌）に森山茂（面識あり）など十数名、そして本間樂寛のエッセイ「歌作者の手帳より」、成田憲三「大正十五年同人作歌表」、六號雜記（敏夫・浩・憲三・浄）、編輯後記（村野次郎）である。

いかにも正月號と呼ぶにふさわしく、賑やかな誌面になっている。

まず同人欄の巻頭の村野次郎「枇杷の花」六首から読んでいこう。

枇杷の花

①つばらなる櫛の梢に冬の日の光るもさむし年暮れんとす

②井戸の邊の土に敷きたる炭俵夕かけながらすでに凍れり

③餘す日もいづくばくあらず枇杷の木の垣根にさむく花咲きにけり

④夕ぐれは玻璃戸にかかる冬雨のしづくするさへうらががなしけれ

⑤いままがた霰こぼしてゆきし雲さむざむとして夕焼けにけり

⑥夜はいまだ宵と思ふに月あかく鶏鳴きにけりものあやしき

一読して気付くのはルビの多さである。⑥

の鶏トリを除けばルビはなくとも読めそうだが、先生の「平易平明」の精神は、こんなところにも生きている。歌人の中にはわざと難しい字を使いたがる者も居るが、先生の精神を見做すべきである。

一連を通読すれば、香蘭人ならず⑤の歌の前で足を止めるだろう。後に『楞風集』そして『次郎三百首』にも採られた作品で、わたしたちには馴染み深い。

かたちの上では三句切れになっているが、読者にはその切れを感じさせない滑らかな歌で、愛唱にも耐えうる声調を持った一首。変わりやすい冬空を軽妙に掬って、簡素で清潔感さえ漂わせている。

さて①の歌、巻頭に置いて一連を俯瞰する趣を持った一首。わたしはかねがねこの種の作品を一連の序歌と呼び慣わしている。手慣れた歌で難を言えば、結句は決まりすぎの感無きにしてもあらずだが、これも序歌に負わされた役割だろう。

ところで初句の「つばらなる」は、わたしは短歌の道に入るまでこんな語法を知らなかった。広辞苑には「つばらか(委曲か)、くわしいさま。こまこま。つまびらか」とある。

つまびらかは日常語だが、「つばらか」は矢張り短歌の世界のものだろう。

②の歌、電気やガスが普及した今日、「炭俵」はめったにお目にかかれない。広辞苑には「炭を入れる俵。藁・葦・萱などでつくる。また、それに炭を詰めたもの」とあるが、肝腎の「炭」が分かるかどうか。これの理解は読者に委ねよう。暇があれば「薪炭」「薪炭商」などにも目を広げて欲しい。

余談はともかく、先生のご実家の井戸の周辺には、霜や雪に難儀をしないように用済み

の炭俵が敷かれていたのだ。

③の歌、この一連に人の気配はしないが、ご実家の歳末風景が周辺の自然のうちに歌い留められている。アクセントになっている枇杷の木の花が、さむざむとして慌たしい年の瀬に彩りを添えている。年の瀬はなぜか古里への愛着と郷愁が増す。

ただこの一首、枇杷の木の垣根に咲いていたのは、どんな花だったのか読者は知りたくなるが、先生は毎冬見慣れて「花」というだけで無愛想である。

あるいは内容的には四句までで意は尽くされているので、結句はあえて重量のない光景

か言葉を選ばれたものかも知れない。

④の歌、目につくのは結句の「うらがなしけれ」である。広辞苑には「心に悲しいと思う。何となく悲しい」とあり、意味的には四句までの情景を担って異とするに足りないが、概念語がいささか他人行儀に聞こえる。

しかしこのような完結の仕方に賛成の意見もあろう。使い勝手の良い概念語はなかなか曲者である。

⑥の歌、ここでも結句の突き放し(とも読めよう)が気になる。つまり④と同様に肝腎な個所が概念的な把握で塞がれてはいまいか。それでも意味は通じようが、外側から言葉をあてがった感じで実感からは離れる。

月あかりのもとに聞く鶏の声が、どこか遠いドラマの世界を連想させたのだろう。「あやし」は手元の辞書には「怪し」しか収録されていないが、恐らく「妖し」のイメージで「魅惑的である。不吉である」の意だろう。妖しい姿、妖しい魅力の持ち主などと同様のイメージである。

事実が事実の内側に留まらず、読者をイメージの世界に連れ出したところがこの種の歌のキモである。